

過去の哲学者がどのような問いに向き合い、どのように考えたかを知ることは、とりもなおさず、私たち自身が、当時の人間と同じような愚かな過ちを再び繰り返すことのないよう、高い費用を払って得た教訓を学ばせてもらうという側面があります。

全体をどうやって紐解こうか、考えてみたのですが、ほんとに長くて、修飾関係が難しい！！実際、日本語を反映させようと、接続詞や修飾語をつなぎ、継ぎ足し、訳出したものをネイティブにチェックしてもらおうと、まんまと2文に直されるという経験が、何回もあります。なので、ここでは、これくらいのを2つに分ける技術の紹介のつもりで、発想の手順を説明していきます。(1文で表現したのものも、モデルアンサーに入れています。日本語で1文のものを英語にする時に2文にするというのは、受験生としてはかなり難しいと思っているので、安心してくださいね！)

英文で文章を作る際、心地よく1文と言える限度は、主節に対して、前後に副詞節が一つずつ付くくらいです。そう考えると、SVが3つくらいのカタマリで切るといいということです。上の文で考えてみます。読み手には負担をかけるかもしれませんが、一回しか切らなくていい2文、読み手に負担をかけないが、構成が若干難しくなる3文にすることが考えられます。今回は、2文にするのをお見せしたいと思います。

まとめ方にはいくつかの方法があると思いますが、時系列でまとめるというのはそのうちのひとつです。過去の話も入ってきているので紛らわしいですが、主眼は現代です。この時代の人について話をしているということを考えながら、ざっくりと並べてみると、次のようになりました。

- (1) **【どのように向き合い考えたかを知る】⇒【教訓を学ぶ】⇒【過ちを繰り返さなくない】**

これを3つ並べることができるのですが、今回は、前半の2つをカタマリにして、2文で表すことになっています。どれをペアにするかは、観点の問題だと思います。今回は次のようにしました。

- (2) **【どのように向き合い考えたかを知って、教訓を学ぶ】⇒【過ちを繰り返さなくない】**

問題文を参考に、この2つの述語を中心に日本語を整理してみると、次のようになります。

- (3) 過去の哲学者がどのような問いに向き合い、どのように考えたかを知ることは、とりもなおさず、高い費用を払って得た教訓を学ばせてもらうという側面があります。
- (4) 私たち自身が、当時の人間と同じような愚かな過ちを再び繰り返すことがなくなります。

これをそれぞれ訳出していこうと思います。

**A. 過去の哲学者がどのような問いに向き合い、どのように考えたかを知ることは、とりもなおさず、高い費用を払って得た教訓を学ばせてもらうという側面があります。**

---

日本語を参考に「側面があります」あたりから述語を探してみると、それを生かし、**There is an aspect**などを考えてしまうかもしれませんが、あまり見たことがない表現でもあります。なので、何かうまい訳出の方法はないかと考えます。

しかし、2つに分けたものの、相当長いSV構造です…。こういった時に時々使えるのが、**一つの出来事・状態で表されているものを二つの出来事・状態に分ける**という技術です。1文の中に含まれるイメージを膨らませて、文の中心である述語になりそうな、2つの出来事を探して、接続詞などでつないでいきます。

そういえば、全体方針で、この部分を取り出すときに、そもそも2つの出来事をまとめましたよね？使ったイメージが(1)に含まれていました。これでいきます。

**(5) 【どのように向き合い考えたかを知る】→【教訓を学ぶ】**

**【知る】**とありますが、**【知らない】**場合も想定されています。イメージとして、次の文と矢印で結ぶことができ、**【逆のことを想定している】**場合のつなぎの表現は、

▪ **if (S)(V) 「もし(S)(V)するなら」**

です。「晴れなら」というのは、**【晴れない場合も想定している】**ですよ？なので前半を **if (S)(V)**の(S)(V)の中に入れて条件節を作り、**【教訓を学ぶ】**につなげることにします。

ここまで来て、いまさらという感じもしますが、「側面があります」が流されています。もし、きれいに訳出できるなら、それをきちんと訳

出してもいいと思いますが、なかなか見つからないということと、そもそも、文意に大きく影響を与えているほどの意味が感じられなかったので、思い切って、ここは表現しないことにしました。この判断、ちょっと難しいかもしれませんがね。

## (a) 【過去の哲学者がどのような問いに向き合い、どのように考えたかを知る】

---

まず述語です。日本語にも表れている「知る」から考えてみます。

### a. WH(S)(V) かを知る

---

「知る」というのは、【知らない状態】から【知る状態】への変化です。こういった時は、**know** よりも **discover** の方がしっくりきます。実際には、**if (S)(V)**に入れば、**know** は【知るようになる】と解釈してもらえますのですが、ここでは **discover** を使っていきます。

#### ▪ S discover WH(S)(V) 「SはWH(S)(V)かを発見する(知る)」

です。【発見する主体】である **S** には【現代の人】というイメージの表現が入ります。問題文を確認してみると、そもそも、「私たち」という日本語を使っていますね。 **we** を入れます。

### (6) we discover WH(S)(V)

「発見する内容」である **WH(S)(V)**の部分は、2 つに分かれています。それぞれを訳出して、**and** で結び、**WH(S)(V)**に入れます。

## b. 過去の哲学者がどのような問いに向き合い

---

この部分も、名詞節とはいえ、(S)(V)の構造をしています。なので、述語から取り組みたいのですが、話を分かりやすくするために「問い」から始めます。

「問い」は **a problem** でも **a question** でもどちらでもいいと思いますが、ここでは哲学者を悩ませるほど解決するのが難しいということで **a problem** にしていきます。

さあ、述語です。日本語をヒントにすると「向き合う」で、ぱっと該当する英語が出てくる部類ではありません。イメージをしっかりと浮かべてみると、【**うむ～**】となっているのが浮かびます。出てきたのが **think** です。これはこれでいい表現なのですが、次の「どのように考えたか」の訳出で使いたいので、別の表現を探して、より良い和文英訳を目指します。

もっとイメージを広げると、【**できたー!**】になれるように、今【**うむむ～**】となっているイメージが浮かんできました。「問い」にたいして【**やったー!**】となるのは、**solve** か **answer** ですね。 **a question** に【**やったー**】となるのは、

- **S answer A 「S は A に答える」**

ですが、**a problem** に対しては、

- **S solve A 「S は A に答える」**

です。そして、【**うむむ～**】となって、悪戦苦闘している状態は **try** ですね。

- **S try to DO 「S は DO しようとする」**

を使います。

(7) **S try to solve A**

「努力している主体」は、日本語から、「過去の哲学者」です。( the ) past philosophers や ( the ) philosophers in the past どちらでもいいと思います。ここでは the 付きで後者を選択します。

(8) the past philosophers tried to solve A

【解決する対象】は、これももう出ており、a problem ですが、実際には一つだけではなかったはずなので、problems にしておきます。

(9) the past philosophers tried to solve problems

最後に疑問詞の処理です。「どのような」のように【種類】を問う疑問詞を含む表現は、

- what A 「どんな A」

や

- what kind of A 「どんな(種類の)A」

などがあります。どちらでもいいのですが、前者を使います。A は problems です。なので what problems というカタマリになります。そして、疑問詞を含むカタマリは、それが含まれる(S)(V)の先頭に表現されるのが基本です。なので次のようになります。

(10) what problems the past philosophers tried to solve

c. どのように考えたか

---

述語は think です。

- S think of A 「S は A を考える」

です。**【考える主体】**である **S** には「過去の哲学者」です。一度出てきているので、**they** を入れます。**【考える対象】**である **A** には、この前に出ている「問題」です。一度出てきているので、対応する代名詞である **them** にします。

(11)      **they thought about them**

**they** と **them** が並んでいて、若干不安がよぎりましたが、**think** の前と **about** の後ろで**【人】**と**【考える内容】**がくるのが典型的だということもあり、誤解されないだろうという想定の下、このまま進めることにしました。

最後に「どのように」の部分です。**【方法】**を問う疑問詞は **how** です。これを(11)の先頭に置きます。

(12)      **how they thought about them**

**d.      a. + b. + c.**

---

予定通り、(10) **what problems the past philosophers tried to solve** と (12) **how they thought about them** を **and** で並べ、(6) **we discover WH(S)(V)**の **WH(S)(V)**に入れます。

(13)      **we discover what problems the past philosophers tried to solve and how they thought about them**

## (b) 【とりもなおさず、高い費用を払って得た教訓を学ばせてもらう】

述語の「学ばせてもらう」から入ります。

### a. 教訓を学ばせてもらう

「～させてもらう」があるので、立ち止まって考えてみます。日本語は、こういった語尾が発達していて、訳出すべきかどうか、考えてしまう時が頻繁にあります。基本、**イメージに大きな違いがなければ訳出しない**という方針が便利だと思います。

「弟に数学を教える」と、「弟に数学を教えてあげる」、「弟に数学を教えてやる」は、ニュアンスの差はありますが、訳出できるほどの差ではありません。が、「弟に数学を教えてもらう」になると、教える方向が全く違っており、**【教える側】と【教えられる側】**が逆転しています。これは、受け身なりなんなりと表現可能です。

そう考えると、ここでは、「学ぶ」と「学ばせてもらう」で訳出できるほどの大きな違いがないと考え、「学ぶ」をベースに訳出することにします。

「学ぶ」に該当する表現は **study** か **learn** ですね。ここでは、**【教訓自体について考える】**わけではなく、**【教訓を習得する】**なので、後者を選びます。

#### ▪ S learn A 「S は A を学ぶ」

です。**【学ぶ主体】**である **S** には引き続き **we** が、**【学ぶ対象】**である **A** には **lessons** 「教訓」が入ります。**【いつも学ぶ】**わけではなく、**【(a)をすると学ぶ】**んですよね？ なので、100%のものではないので、**【そういう可能性がある】**というのを表すために **will** を使います。

(14) we will learn lessons



## b. とりもなおさず、

---

【自動的に】というイメージです。【(a)ならば、「自動的に」(b)】ということですが、【(a)を実現すれば、そのまま(a)になる】ということです。まず、ぱっと浮かぶ **automatically** は、こういった場面で使えるかどうか、自信がありません。そして、意味的に、なくても、日本語の内容はそれほど違いがないと考えて、ここでは表に表さないことにします。イメージ化を含め、これはほんとに難しい判断でした。

## c. 高い費用を払って得た

---

「教訓」を修飾する関係詞節ですね。(S)(V)がベースなので、また述語から考えます。「得た」をヒントに **get** や **gain** が浮かびました。それぞれ、

- S get A 「SはAを手に入れる」
- S gain A 「SはAを手に入れる」

という使い方ですが、【手に入れたもの】である A には、**lessons** が入る予定です。コロケーション的にどちらも OK です。ここでは後者を選びます。【手に入れる主体】である A には「過去の哲学者」に当たるものが入ります。一度使っているので **they** にしておきます。

(15)      **they gained lessons**

**lessons** 自体、先行詞と重なります。関係詞 **which** にして、カタマリの前にもってきておきます。

(16) which they gained

## 高い費用を払って

この部分は、「得た」を修飾しています。修飾表現は、つなぎの語句から表現すると便利です。日本語のつなぎの表現は末尾にあることが多いので、「て」あたりで表されているイメージを浮かべてみます。【「払う」という方法で】であれば

- by DOING 「DOING することによって」

が使えるそうです。「払う」と「得る」が、時系列に並んでいるというのを前景化したければ、

- after (S)(V) 「(S)(V)する後で」

などいろいろ考えられますが、ここでは2番目を使います。

(17) after (S)(V)

ではその中に入れる述語から探していきます。ここでは「高い費用を払う」とありますが、実際にお金を支払っているわけではありません。なので、イメージをしっかりと浮かべておきます。哲学者たちが学びを得るまでに支払うものは何かと言えば、【時間】や【努力】ですね。time and effort を pay することは、コロケーション的にできないので、いい組み合わせになる述語を探します。両方ともつかえるという観点で自分のレパートリーから考えると、spend が浮かんできました。

- S spend A 「S は A を使う」

ですね。これはみんなには難しい発想だったかもしれません。

(18) S spend A

【使う主体】である「過去の哲学者」は、一度使っている所以他们、【使われるもの】である A には予定通り **time and effort** を入れます。過去の出来事なので **spend** を **spent** にしておきます。

(19)      **they spent time and effort**

「高い」は、一瞬 **high** にしたくなりますが、ここでは【**time と effort の量の多さ**】です。**much** もしくは **considerable** ですね。ここでは前者肯定文では **much** 単独で使わない傾向があるので、**so** を添えておきます。

(20)      **they spent so much time and effort**

そしてこれを(17)で作った **after (S)(V)の(S)(V)**に入れて、(16) **which they gained** の後ろに修飾語として置きます。

(21)      **which they gained after they spent so much time and effort**

d.      **a. + b. + c.**

---

b.の「とりもなおさず」は訳出しないことにしたので、無視します。

c.の(21)は、予定通り、(13) **we will learn lessons** の後ろにつなげます。

(22)      **we will learn lessons which they gained after they spent so much time and effort**

(c) (a) + (b)

---

さあ時間がかかりましたが、方針通りに**(a)**を条件節にして、**(b)**につなげます。主節である**(b)**の前に置いても後ろに置いてもいいのですが、今回は、代名詞の調整が面倒なので、前に置くことにします。カンマを挟むのも忘れないでくださいね。

- (23) **If we discover what problems the past philosophers tried to solve and how they thought about them, we will learn lessons which they gained after they spent much time and effort.**

## B. 私たち自身が、当時の人間と同じような愚かな過ちを再び繰り返さない

---

述語を中心に表現します。

### (a) 私たち自身が、愚かな過ちを再び繰り返さない

---

「繰り返さなくない」をヒントに **repeat** が浮かびました。

#### ▪ S repeat A 「S は A を繰り返す」

という用法ですね。【繰り返す主体】である **S** には、**we** もしくは、「自身」を生かして **we ourselves** がいけそうです。今回は前者を使います。【繰り返してしまうものごと】である **A** には、日本語を参考に、**mistakes** が入ります。

「繰り返さない」のは、【いつも】ではなく、【学びがあった場合】なので、【100%のこと】ではありません。それを表現するために、**will** を使って否定文にしました。

(24) **we will not repeat mistakes**

#### 愚かな

---

**silly** でも **stupid** でもいいと思います。それを **mistakes** 「過ち」につなげます。

(25) **we will not repeat silly mistakes**

## (b) 当時の人間と同じような

---

修飾表現はつなぎの表現からですね。「ような」に着目します。【類似】を表すのに、

- like A 「A のような」

もありますが、この表現全体が修飾する mistakes 「過ち」を

- the same A as (S)(V) 「(S)(V)するのと同じ A」

の A に入れることもできます。ここでは後者を取りたいと思います。

### (26) the same A as (S)(V)

この the same A as (S)(V) の as (S)(V) は A を先行詞、as を関係詞とする関係詞節っぽく扱われるのが特徴です。なのでまずは(V)から探します。そのために、当時の人間が何をしていたのか考えます。「過ち」を修飾することで気づきやすかったかもしれませんが、イメージ的には【あちゃーっ】ってなっています。make a mistake の make ですね。

- S make a mistake 「S は間違いを犯す」

です。

### (27) S make a mistake

【間違いをしてしまう主体】は日本語を参考に、「当時の人間」です。他の動物と比較をしているわけではないので、human beings のようにする必要はありません。people を使います。「当時の」は、university students today 「今日の大学生」のように、通例副詞表現で使うものを、そのまま people の後ろに置けることがあります。「...年前の」のように、students 7 years ago などは、見たことがないので、避けませんが、in those days 「当時に」は、よく名詞を修飾するのを見たことがあったので、後ろにつけました。

(28) **people in those days made a mistake**

そして **the same A as (S)(V)** の **as (S)(V)** は **A** を先行詞、**as** を関係詞とする関係詞節っぽくふるまうので、先行詞っぽい **mistakes** と同じである **a mistake** は関係詞 **as** となって、前に置かれたと考えます。

(29) **the same A as people in those days made**

(c) (a) + (b)

---

(29)を(25) **we will not repeat silly mistakes** に組み込みます。

(30) **We will not repeat the same silly mistakes as people in those days made.**

**C.        A. + B.**

---

**A.と B.をそのまま並べて終了です。**

- (31)        **If we discover what problems the past philosophers tried to solve and how they thought about them, we will learn lessons which they gained after they spent so much time and effort. We will not repeat the same silly mistakes as people in those days made.**

### **Model Answer**

If we discover what problems the past philosophers tried to solve and how they thought about them, we will learn lessons which they gained after they spent so much time and effort. We will not repeat the same silly mistakes as people in those days made.